

花はな 暦ごよみ

〔要旨〕中国における「花暦」すなわち「多くの花の開落によつ

て時候を定めた暦」は、春の農作業の開始時期の目安となる特定の花の開花を教える「花信風」や、一月から十二月まで月順に草木の花の手入れなどを記した「花月令」などの実用のため
に成立したものを基として成立したと考えられる。しかし、日本において成立した「花暦」は「花を四季順に並べて、花の咲く時節と名所を記して作った暦」などと定義できるものであり、都人の風雅の世界が色濃く反映したものとなっており、花の開花と季節の到来との関係も日本独自のものが存在するようである。

〔キーワード〕花暦 花信風 花月令 農事暦 茶花

生け花

はじめに

草木の開花や鳥の初鳴きなどを種播きや田植えの開始時期の目安とすることがかつて行われていた。それを「春の種子おろす時節は野辺にある日廻り花のさくを見てまけ」「卯の花のつぼめる時に初植そ盛の頃は末田なりけり」などの和歌にした『会津歌農書』（宝永元年〔一七〇四〕刊）はよく知られているが、早く『古今和歌集』に見える「いくばくの田を作ればかほととぎすしでの田長を朝な朝な呼ぶ」（巻19・一〇一三）などもそうした知識を踏まえた歌であろうとする説もある。そうした農作業に関わらない者にとっても草木の開花や鳥の初鳴きなどは季節の移り変わりを知るものとして注意され、自然暦と呼ばれるものが成立していたにちがいない（本居宣長「真暦考」）。その中からやがて「多くの花の開落によつて時候を定めた暦」

吉野 政治

『大漢和辞典』と定義される「花暦」が生まれることは洋の東西変わることはない。しかし、更にそれに風流の要素が加わって「花を四季順に並べて、花の咲く時節と名所を記して作った暦」(『日本国語大辞典』)と定義される「花暦」が成立してきたことは日本独自の展開と考えてよいであろう。そのことについてこれまで研究はなされていないようであり、本稿ではそのことについて述べつつ、日本の「花暦」の本質について考えてみたい。

1 花信風と花月令

日本的な「花暦」すなわち「花暦」の成立について考える前に、その前史として注目される二つのものに注目しておきたい。ともに中国に起原を持つものである。

ひとつは風の花便りとも訳すべき「花信風」である。昼夜の長さや寒暖の変化に応じてそれぞれの草木が花を咲かせようとする時にそれを知らせるように風が吹く。この説は古く『呂氏春秋』に発するとも言われるが、その風を後世の人は「花信風」また「花信」と情緒溢れる名で呼んだ。その「花信風」は二十

四回しか吹かない。ただ、それは初春から初夏の間に吹くとも、二十四気七十二候(注①)に関係づけられて、冬至の次の小寒一候に一番の風が吹き、立夏の前の穀雨三候に二十四番の風が吹くとも説明される。例えば、宋の祝穆撰『古今事文類聚』(前集・卷八・天時部・清明・古今事実詩話・花信風)に、

江南自_二初春_一至_二初夏_一、五日一番風候、謂_二之花信風_一、梅花風最先、楝花風最後。凡二十四番以為_二寒絶_一。後唐人詩云、楝花開後風光好、梅子黃時雨意濃。徐師川詩云、一百五日寒食雨、二十四番花信風。又古詩云、早禾秧_一雨初晴後、

苦_二楝花_一風吹日長。東皐雜錄(注②)

とあるのは前者の例であり、明の王象晋の纂輯『二如亭群芳譜』

(貞部・花譜)に(注③)、

二十四番花信 一月兩番、陰陽寒暖、各隨_二其時_一。但、

先_レ期一日、有_二風雨_一、微_レ寒者、即是。梁元帝纂要

小寒 一候梅花、二候山茶、三候水仙。

大寒 一候瑞香、二候蘭花、三候山礬。

立春 一候迎春、二候桜桃、三候望春。

雨水 一候菜花、二候杏花、三候李花。

驚蟄 一候桃花、二候棗棠、三候薔薇。

春分 一候海棠、二候梨花、三候木蘭。

清明 一候桐花、二候麦花、三候柳花。

穀雨 一候牡丹、二候餘蘼、三候棟花。花本 雑考

とあるのは後者の例である。いずれにせよ、春になって（ある

いは春に向かって）一番の風が吹くと、昼が長くなりはじめ、

二十四番目の風が吹くと夏になって、霜の心配はなくなる。

『会津歌農書』が示すように、こうした知識は種蒔きなどの時

期を過たず、秋の収穫を確保するための知識として整理された

ものであったと思われる。

もうひとつは「花月令」である。中国において一月から十二

月まで月順に草木の花の開落などについて記したのはこれに始

まるようである。前出『二如亭群芳譜』（以降『群芳譜』との

み言う）には「花信風」と並んで、次のような「花月令」が見

える。

花月令 灌園野史

正月 是月也 迎春生 桜桃胎 望春盈眸 蘭蕙芳 李

能白 杏花飾其靨

二月 是月也 桃夭 棣棠奮 薔薇登架 海棠嬌 梨花

溶 木蘭競秀

三月 是月也 白桐榮 茶蘼條達 牡丹始繁 麦吐華

楝花忘候 楊入大水為萍

四月 是月也 杜鵑翔 木香升 新篁數粉 罌粟滿 芍

葉相 木筆書空

五月 是月也 葵赤 紫薔葩 簪葡始馨 夜合交 榴花

照眼 紫樨降于桑

六月 是月也 萱宜男 鳳仙來儀 菡萏百子 凌霄登

茉莉來賓 玉簪搔頭

七月 是月也 桐報秋 木槿榮 紫薇映月 蓼紅 菱実

鷄冠報曉

八月 是月也 槐黃 蘋笑 芝草奏功 桂香 秋葵高擢

金錢及第

九月 是月也 菊有英 巴竹筍 芙蓉綻 山藥乳 橙橘

登 老荷化為衣

十月 是月也 蘆傳 冬菜蒔 木葉避霜 芳草斂 漢宮

秋老 芋麻護其根

十一月 是月也 芸生 蕉紅 枇杷綴金 楓丹 巖桂馥

松柏後凋

十二月 是月也 梅蕊吐 山茶麗 水仙凌波 茗有花 瑞

「花月令」と「花信風」との違いは、「花信風」が春季の開花だけに限るのに対して一年を通して植物の状態について取り上げていること、また「花信風」が草木名を示すだけなのに対して、修辭を施した文の形で植物の状態を記していることである。こうした文の形で草木の状態を記すのは七十二候と同じであるが、注目したいのは十二箇月の時節に応じて布く政令を記した月令における七十二候の位置づけ方である。候は氣を五日ごとに分けたものであり、氣の下に位置づけられるべきものであるが、月令ではそれぞれの月の説明の中に現れてくる。例えば『礼記』の月令（以降『礼記月令』という）では次のようにある（引用は嘉慶二十年重刊宋本『十三經注疏』（中文出版社刊）による。候は「注疏」に「時候也」と明確に記されているものに限った。傍線は引用者）。

孟春之月 東風解冻・蟄蟲始振・魚上冰・獺祭魚・鴻雁來
仲春之月 始雨水・桃始華・鷹化為鳩・始電
季春之月 桐始華・田鼠化為鴽・虹始見・萍始生
孟夏之月 蜩蟬鳴・蚯蚓出・王瓜生・苦菜秀
仲夏之月 小暑至・蟠蟪生・鶉始鳴・反舌無聲・鹿角解・

季夏之月 温風始至・蟋蟀居壁・鷹乃學習・腐草為螢
孟秋之月 涼風至・白露降・寒蟬鳴・鷹乃祭鳥・鳥用始行
戮
仲秋之月 盲風至・鴻雁來・玄鳥歸・群鳥養羞・雷乃收聲・
蟄蟲坏戶・殺氣浸盛・陽氣日衰・水始涸
季秋之月 鴻雁來賓・爵入大水為蛤・鞠有黃華・豺乃祭獸
戮禽
孟冬之月 水始冰・地始凍・雉入水為蜃・虹藏不見
仲冬之月 冰益壯・地始折・鶡旦不鳴・虎始交・芸始生・
荔挺生・蚯蚓結・麋角解・水泉動
季冬之月 雁北鄉・鶡始巢・雉雊鷄始乳・征鳥厲疾・水澤
腹堅

傍線を付したものは草木の状態に注目した候であるが、このように植物に関するもののみを集めて月令に編むと「花月令」になろう。

『群芳譜』以降、中国においては植物について書かれた書物（広義の「花譜」）の名に「月令」が用いられたり、月順に花を並べて説明することが行われるようになったようである。佐藤

武敏氏の「中国の花譜について」(『中国の花譜』東洋文庫・解説)によると、明時代には周文華著『汝南圃』の中に「月令栽種」があり、陳詩教著『灌園史』に「花月令」があり、戴羲著『養余月令』がある。また、夏目著『葯圃同春』は「月別に花卉の名を記し、若干の注を施したもの」である。また、清時代になると『群芳譜』を改編した『広群芳譜』、徐石麒の『花備月令』などがある。

2 貝原益軒の『花譜』

さて、日本においても草木の開花に注目した農事暦が成立していることは、先に『会津歌農書』などの例を示したとおりであるが、農作業のためではなく、開花の月順に賞玩すべき草木を纏めたものに、貝原益軒の『花譜』(元禄七年(一六九四)自序・同十一年刊)がある。この書は上中下の三巻からなり、中巻から下巻の中ほどにかけて、各月々に花を咲かせる草木が次のように取り上げられている(振仮名は原文のまま)。

正月 梅・山茶花・福寿草・金盞花
 二月 山礬・杏・辛夷・小桜・垂糸桜・桜・李・連翹・

桜桃・山桜桃・玉蘭花

三月

桃・海棠・檀子・梨・薔薇・月季花・玫瑰花・
 除蘼・櫻絲花・芫花・胡蝶花・笑靨花・棗棠・草

棗棠・牡丹・躑躅・紫藤・華蔓・椶櫚・鈴挂・

白及・燕子花・鳶尾・石南・美人蕉・粉团・雪柳・

高蒿・馬蘭・白頭翁・櫻草・庭櫻・紫荊樹・蝦根・

荒世伊登字・仙台萩・草牡丹・米囊花

四月

菖蒲花・錦帶花・鉄線花・石竹・虎耳草・紅藍花・

白丁花・芍薬・小藤・杜鵑花・仏桑花・下毛・卯

五月

花・美人草・檀特花
 橘・金糸桃・鼓子花・紫陽花・梔子・剪春羅・萱

草・夏菊・石榴・蜀葵・錦葵・黄蜀葵・五月菊・

鷹爪・合歡
 蓮・紫微花・鳳仙花・風蘭・百合・凌霄花・

剪秋羅・秋海棠・牽牛花・茶蘭・金沸草・萍蓬草・

慈姑花・鉄色箭・浮薔・飛廉・玉簪花
 蘭・東浦塞牽牛花・桔梗・鶏冠花・槿・文菊・

七月

龍胆草・楨桐・紫苑・睡蓮・白粉花・午時紅
 鹿鳴草・木芙蓉・木犀・女郎花・独頭蘭・附子

八月

九月 菊・秋牡丹・鬱金・通和

十月 寒菊・枇杷・茶梅花・海紅花

十一月 水仙・千日紅・三波丁子

十二月 臘梅・迎春花

多くの植物を分類する場合、本草学などのように色や形や種類などによることが一般であった時代に、このような形で纏めたのは、中国の「花月令」の影響が考えられるが、『花譜』の引用書目には『月令広記』『事文類聚』の名はあるものの、「花月令」を収めた『群芳譜』等の名は見えず、本文中にも利用された形跡もなく、益軒独自のものであろう。ただし、この『花譜』は、開花の月順に賞玩すべき草木を纏めたものではあるが、今日言うところの「花暦」とは異なり、その月に開花を迎える草木の「下種」「挾枝」「接樹」などの時期を説明することが主となっている。本書の「自序」に、

苟し花卉を愛し観ることを欲せば、則ち之を養ふの道も知らずんばあるべからざるなり。(中略) 花譜三巻を作り以て之を種植し之を培養するの法を述ふ。他日の間覧に備ふべしと云ふこと爾り。(原漢文)

とあり、また、総論として書かれた上巻も栽培法を説明したも

のであり、本書の目的はそこにあった。

しかし、各月に取り上げられた草木の説明の中には、例えば、梅 萬葉集に、うめとも、むめともよめり。冬より二月に至るまで花を開く。此花百花にさきだちてひらき、花

の兄なるゆへに、百花魁と称す。雪霜をしのぎて、君子の操あり。且清香粉色もろもの花にすぐれて、いとめでたし。故に和漢ともに、富貴貧賤智愚賢不肖をへだてず、なべて古今の人の玩賞きはまりなく、詩歌の詠も又はなはだ多し。(下略)

桜 ひとへ桜、春分の後花をひらく、彼岸桜より十日ばかり遅し。又八重桜に先立つ事、十日斗なり。花のときは、所によりて遅速あり。吉田の兼好は、ひとへ桜をめでしが、花のさかりは、立春より七十五日の由、徒然草にかけり。されども、今平安城のひとへ桜は、立春より六十五日をさかりとす。(下略)

など、和漢の異名や詩歌散文に見られる記述、さらに名所の紹介などもあり、むしろそうした内容に多くの文字が費やされている。下巻の後半には「草木の実、葉、木だちなどうるはしくて、花にあらざれども愛賞すべきもの」(「目録」)として草三

十四種と木三十三種が取り上げられており、「自序」には、

君子の心、本然の楽を失はざれば則ち凡て天地の間に満つるもの心目の触るるところ皆以て其の楽を資するの具と爲るに足れり。況んや花木芳草尤も以て玩賞すべきものをや。然れども心物に寓すべくして物に溺るべからず。物に寓するものは天理の以て樂しむ所なり。物に溺るるものは人欲の以て苦しむ所なり。(中略) 嗚呼、天地生物の氣象見るべくして言ふべからず。能く此れを觀る者は道を知るなり。(原漢文)

とある。こうした内容は益軒の草木を愛した人柄からおのずから溢れてたものようである(注④)。例によって儒者風の教訓も混じるものの、草木そのものをそれ自体として賞玩する姿勢が顕著に見られることは、日本における「花暦」成立前夜の書として位置づけることができよう。

3 「花信風」の日本における変容と「花暦」の成立

「花信風」は近世の日本にも知られていた。慶長五年(一六〇〇)に書かれた『百瓶華序』(『続群書類従』本による)に、

夫華者、自天地開闢以來、每歲得二十四番花信風而草木所開也。(中略) 大凡四時之間、万木千草、雖三更開花、就中以春為花之盛時也。其在春以梅為百花之魁。何哉。蓋、梅獨得花信第一番之風而早開花。因之諺曰、始於梅花終於棟花。良有以也。自早梅資始、群卉和微暖、次第開花也。

と見え、前述のように益軒の『花譜』にも『事文類聚』が引用されており、『和漢三才図会』(正徳二年(一七二二)刊)にも凹形の図に仕立てられた「二十四番花信風」が見える(注⑤)。これは春にのみ吹く花信風であるが、若槻敬著『畏庵隨筆』(文政四年(一八二二)序)に、

二十四番花信風は、梅、山茶、水仙、瑞香、蘭花、山礬、迎春、桜桃、望春、菜花、杏花、李花、桃花、棗棠、薔薇、海棠、梨花、木蘭、桐花、麦花、柳花、牡丹、茶蘼、棟花なり。風土異なれば、花候を論ぜず、花を弄ぶは雅致あり。

とある。農作業に直接関わらない知識人や文人たちが「花候を論ぜず、花を弄ぶは雅致あり」と、時や花を限定せず、それだけの時節の花々を取り挙げる試みを行なうのは自然の勢いであ

ろ。それは中国の風流人においても同様であり、既に楊慎（二四八八―一五五九）の『升庵集』では、花信風は一月に二回ずつ、一年を通して吹き、鶺鴒・木蘭・李花以下、水仙・山茶・瑞香までの二十四の花の開花を告げるものとなっている^{注⑦}。

また、『東都歳時記』（後掲）によると、日本の安永年間（一七七二―一七八一）に一枚刷りの『花信風』が発行されているが、それにはそれぞれの花の名所までも記されていたようである^{注⑧}。すなわち「花信風」という言葉は日本においては実質上「花暦」と同じものを指していたものと推測されるのであるが、天保二年（一八三一）には『花信帖』という名の俳諧書が出版されている一方で、安政六年（一八五九）には『はなこよみ』という名の、同じく俳諧書が出版されている（『国書総目録』による）。おそらく二つの書の名は語感の好み、語性の違いに対するこだわりによる違いでしかないであろう。

「花暦」という語は、中国では昔も今も一般には用いられていない語のようである。清の光緒三十四年（一九〇八）に出版された『辞源』は当時最大の詩文の詞を集めた書であるが、「花暦」の語は見えない（一九七九年商務印館出版の修訂本に

よる）。また一九六五年に新編本の出た『辞海』（中華書局香港分局出版）にも見えない。ただ、日本の諸橋轍次の『大漢和辞典』などには明の程羽文（一六一一―一六四四）の「花暦序」が例として挙げられている。しかし、これは本来「花月令」という名の文章であり（陶珽編『統說郭』巻第四十所収）、清代初期以降に「花暦」と名を変えたものも出まわったものようである^{注⑨}。また、同じく清の康熙二十七年（一六八八）に書かれた陳湜子（扶搖）の『秘伝花鏡』の巻一には「花暦新裁」という項目名が見えるが、これは一月から十二月までの各月に分裁・移植・扦插・接換・圧條・下種・収種・澆灌・培壅・整頓の項目を挙げ、それぞれの月にこれらの作業を行う植物を列挙したものであり、本稿で取り上げている「花暦」の内容とは異なる。現在のところ管見に入った中国の「花暦」の例は以上に留まる。

「花暦」と改題された程羽文の文章が何時日本に知られたのかは現在のところ不明であるが、『秘伝花鏡』は安永二年（一七七三）に京都の林権兵衛と江戸の須屋原平助らによる翻刻が行われている。文政元年、文政十二年にも大坂と京都で補刻本が出ており、さらに山本亡羊の研究書『秘伝花鏡記聞』も出さ

れているので、広く知られていたようであるが、日本人によって書かれた文章に見える「花暦」の初出は安永五年（一七七五）に出された東都弁髦坊輯『草木花暦四時遊観録』（『国書総目録』による）のようである^{注⑩}。この書は斎藤月岑著『東都歳時記』

（文政十三年（一八三〇）刻）の「附言」に（傍線は引用者、

一枚の年中行事、神仏参詣記、縁日略記、花暦の類、諸家の蔵梓に多し。或人云、近世流行するところの花こよみは、

安永中俳人松露庵鳥酔があらわせる『東都四時遊観録』と

いへる一枚ずりに始まりしといふ。あるいは『花信風』と

いへる一枚ずりありともいへり。

と見えるものと同一の書と思われるが、ここで用いられている

「花暦」は、月々の花とその名所を記したもののようである^{注⑪}。

この例が日本における「花暦」の初出例だとすると、「花暦」

という語は、日本において既に本来の意味以上の内容を担って

いた「花信風」という言葉が『秘伝花鏡』から知り得た「花暦」

という語に新しい意味を付与した可能性が考えられる。右の

『東都歳時記』の文も同様の内容の「花こよみ」と「花信風」

が並行して行われていたように読み取れるのもそれを推測させる。

中国および日本における「花暦」という語の成立と、それぞ
れの語の意味の関わり方については、さらに詳しい調査が必要
と思われる。今後の課題としたい。

ところで、先に辞書の定義を紹介したように「花暦」は単に
花の開落時期だけを示す場合と、花の名所の記述をも含む場合
がある。前者は、

盛違へぬ花暦、年年歳歳相似ても

（滑稽本『花暦八笑人』文政三年（一八二〇））

立春の日数算へ、花暦に其氣候を知る事をはかる風流の遊

び人 （人情本『春色梅美婦彌』天保十二—十二年

（一八四一—四二頃））

などの例がそうであるが、本来特に美しい花だけが注目される
ものではない。後者は冊子や折り本の名に用いられている場合
が多いようであるが、鑑賞に値する美しい花のみが注目される。
この意味は日本独自のものと考えられる。四季の花や風物の名
所を解説した書である『江戸名所花暦』（文政十年（一八一七）
刊、天保八年（一八三七）以降『江戸遊覧花暦』と改称。稿末
図1参照）がその代表的例であるが、この書は次のような経緯
によって成立したと言われる。例えば前掲斎藤月岑著『東都歳

「時記」の各月の終わりに「景物」の項目が置かれているが、その中に、

蓮 ○小暑の後、廿日頃より。不忍池 東都第一の蓮池なり。

荷葉しげりて、水面を蓋、蓮萼婉々として、鮮に
 深く、芳香又他にすぐれたり。是を賞する騷人、黎明

より此池に逍遙す。妙音天の祠環、拍戸多く、每家蓮

葉飯を售ふ。当所の名産とす。 (六月の景物)

のような記事がある。こうした記事は『増補江戸年中行事』(初

版享和三年(一八〇三)に始まり、この種の書物に踏襲され

ていくが、それと並行してそうした記事を独立させたものも現

れ出したようであり、『江戸名所花暦』はそれを集大成したも

のであるとされる^{注⑩}。「花暦」の初出と見られる東都弁髦坊輯

『草木花暦 江都順覽四時遊観録』もおそらく同様の経緯で成立したもので

あろう。

日本において「花暦」の語が成立すると、この風流人好みの

響きを持つ語は江戸時代には広く流行したようで、さまざま

分野に用いられるようになった。書名・演目名に用いられてい

るものを『国書総目録』から刊行年初演年などが分かるものに

限って掲げれば、次のような例がある。

歌舞伎 『花暦関紀行』文化六年(一八〇九)

浄瑠璃 『花暦はなごよみいろのしよわけ色所八景』天保十年(一八三九)、『花暦

春陽賑』安政五年(一八五八)、『花暦三題噺』文

久三年(一八六三)

滑稽本 『花暦八笑人』文政三〜嘉永二年(一八二〇〜四

九)

艶本 『花古与見』天保六年(一八三五)、『花暦転寝草

紙』安政五年(一八五八)

人情本 『花暦封じ文』慶応二年(一八六六)

俳諧 『はなごよみ』安政六年(一八五九) 前出

ちなみに、花札の絵柄もまた「花暦」として捉え得るが、花

札は古くは「花かるた」と言い、室町時代に日本にもたらされ

た南蛮カルタの四種各十二枚のカードを、一年十二カ月の十二

種、各四枚に変えたものであり、その成立は寛政から文政年間

(一七八九〜一八二九)とも安永年間(一七七二〜一七八一)

とも言われている^{注⑪}。

4 日本の「花暦」成立の背景

ところで、シーボルトの『日本』“Nippon”に「花暦について」という文章が収められているが（第三巻第五編附録）、そこに文政八年（一八二五）に大坂で発行された木版刷「カノトリ花暦」が紹介されている（文政八年は乙酉であり、カノトリはキノトトリの誤りであろうと言われている）。一枚の絵に一種類の花が描かれた「十二の絵像」であり、「新年の贈物」であると言う。この「花暦」に選ばれている花は次のとおりである。

- 一月 梅 *Prunus*
- 二月 蘭 *Epidendrum*
- 三月 海棠 *Pyrus baccata*
- 四月 麝香百合 *Lilium longiflorum*
- 五月 木蓮 *Magnolia*
- 六月 キンカンウ *Kinkwaso Hemerocallis Sieboldii*
- 七月 芙蓉 *Hibiscus mutabilis*
- 八月 蓼 *Polygonum barbatum*
- 九月 菊 *Chrysanthemum indicum*

十月 橙 *Citrus*

十一月 美人蕉 *Musa*

十二月 椿 *Camellia japonica*

注目したいのは八月の花として「蓼」が見えることである。

『群芳譜』の「花月令」にも七月に「蓼紅」とあったが、「カノトリ花暦」の花々が自然暦や農事暦におけるそれと同じ意味づけで取り上げられているとは思われない。「花かるた」にも松・柳・紅葉といった花ではないものが含まれているが、柳の芽吹きを見て種を蒔く時期を知り、山の紅葉を窺って稲刈りや麦播きの時期とするような農事暦と同じ意味で「花かるた」の絵柄としてこれらの植物が選ばれているのではあるまい。「花かるた」は成立当初は「上流社会に流行」したものであり（『国民之友』明治二十四年二月号記事「花歌留多の流行」）、月々の植物と動物などとの組み合わせも古歌や故事などを踏まえたものである。これらの植物はどのような理由で「花暦」や「花かるた」の中に登場してくるのだろうか。

その理由を考えるヒントを与えるのが、シーボルトが右の文章で、「一八一〇年に江戸にあらわれ、『茶席挿花集』すなわち『茶席のための花の蒐集』というタイトルをもつ『花暦』の中

から」(傍点引用者)「十二カ月を特徴づけるものとしてふさわしいもの」として各月ごとに三種ずつの花を選んでいることである。例えば、一月は梅 *Prunus Mume* 糸柳 *Salix japonica* 福寿草 *Adonis praecox* という具合である。注目したいのはシーボルトが『茶席挿花集』すなわち茶花集を「花曆」と捉えていることである。それは後に引用する彼の文章から窺えるように、西洋の室内に飾られる花とは異なる意味づけを日本の茶席の花に感じとったことに因るものようである。そこで、茶席の挿花について少し検討してみたい。あわせて茶の湯と同様に極めて日本的な美意識による法式を形成している生け花についても、月々の花がどのように扱われていたかを見ることにする。

「四季に変わることなし」と言われる大陸風の室内飾りとは異なり、茶席に飾られる花、すなわち茶花には季節のない花や盛りの長い花は用いられないのを原則とし、特に初花が尊ばれる。それは時節を感じさせるためであるが、それだけではなく、今の今それを生けたこと感じさせる生気ある花であることがより大事だとされる。それは時の間に過ぎゆくものを命を尊んでいるからである(西堀一三著『茶花の話』)。したがって、短時間で凋む朝顔なども用いられることもあり、『古田織部伝書』(慶

長十七年(一六一二)に「花は時間ときのまの色成なるにより、身もと(遠)のけて、花に足音など静かに云々」とあり、『紹鷗茶湯百首』にも「立花など寄て拝見する時は三尺有て此方にて見よ」とあり、宗珠もまた、花は時の間のものであるので、掛け物より先に拝見せよ、というような教えがなされるのである。したがって、結果的に茶花にはその時節その場に咲いているもの選ばれるのであり、特に何月は何の花といった決まりはない。つまり、茶花には厳密な意味での「花曆」はない。現在の『新版茶道大辞典』(淡交社、二〇一〇年刊)の「茶花歳時記」でも、三四〇種の花が挙げられているが、「茶花としてよく使われる月に配した」という注意書きがある注18)。

生け花は茶の湯と同様に仏教と関わりが深い。仏前にはその時節に咲く花が供えられる。

折りつればたぶさにける立てながら三世の仏に花たてまつる
(後撰集・僧正遍照)

折りつれば心もけがるもとながら今の仏に花たてまつる
(為頼朝臣集)

十五世紀頃に発生した床の間の、掛け軸の前に三具足(燭台・香炉または香合・花瓶)を置く正式の飾り方も仏前荘嚴の飾り

方を踏襲したものと云われる。一方で床の間は美術鑑賞の機能も併せ持つところから、生け花は鑑賞の花として重きをなすようになり、独自の理念と形式を整え始める。生け花の成立はおよそ以上のように纏められようが、本稿に関連して注目されるのは、生け花の発展していく方向に大きな示唆を与えたとされる『池坊専応口伝』(天文十一年〔一五四二〕奥書)に(注48)、

花瓶に花をさす事にしへよりあるとはき、侍れど、それはうつくしき花をのみ賞して、草木の風興をもわきまへず、只さしたる計なり。この一流は野山水辺をのづからなる姿を居上にあらはし、花葉をかざり、よろしき面かけをもと、し、先祖さし初しより、一道世にひろまりて、都鄙のもてあそびとなれる也。

とあることであり、また、毎月用いる花が次のように選ばれていることである。

正月 松・梅
二月 柳・椿
三月 桃・杜若
四月 卯花・芍薬
五月 竹・菖蒲

六月 百合・蓮華

七月 桔梗・仙翁花

八月 桜・白楨

九月 菊・鶏頭花

十月 唐水木(みずき)・南天

十一月 水仙花・寒菊

十二月 枇杷・早梅

また、五節句にもそれぞれの定められた花がある。それらの花は文政十年〔一八二七〕に高野長英がシーボルトに提出した蘭文のレポート(「花や枝を裝飾的に花瓶に立てる芸術」とも「活花の技法について」とも訳されている)にも述べられているので、今、それを引用する。

いろいろな草や木は季節に応じて選ばれ、そのことは非常に重要なことなのである。毎年五大祝日に用いられるものは次のとおりである。元三(第一月の第一日から第三日まで)、梅の花、丸葉黄水仙、金盞花。上巳(第三月の第三日)、桃の花、柳の木、萱草およびヤマブキ酴醾。端午(第五月の第五日)、竹、菖蒲、石竹など。七夕又はたなばた棚機(第七月の第七日)、桔梗、仙翁花、梶の葉(木の種類)。重陽(第九

月の第九日)、菊、萩、鶏頭など。人々はこれらの日には上記のうちの一種類だけは生花に使用するように務めるのである。

長英の文章を取って引用したのは、これらのことをシーボルトも知っていたことを確認するためである。ところで、当時ヨーロッパには「花暦」のようなものはなかったのだろうか。シーボルトの『日本』が刊行され始めたのは一八三二年であるが、リース・ド・ブレイ著『ボタニカル・アート』(Lys de Bray "The Art of BOTANICAL ILLUSTRATION" 川本道彦訳 MPC出版)によると、オランダでは一七二〇〜三〇年頃に「花譜(四季の花を咲く順序に従って図示したもの)」が流行していたそうである。一七三〇年に出版されたロバート・ファーバーの『花の十二か月』("Twelve months of Flowers" は、一枚計十二枚の絵であるが、西洋の室内を豪華に彩るように、色とりどりの花が一つの大きな花瓶に溢れんばかりに挿されている【稿末図2「六月」参照】。また、シーボルト以降のものになるが、たまたま管見に入ったものにウージェーヌ・グラッセ (Eugene Grasset 1845-1917) の描いたカレンダー『美しい庭師』(La belle jardiner" 1896、ハンブルク)がある。千

足伸行氏の解説(岩波書店「図書」一九九三年十二月号)によると、パリのデパートの依頼で制作した月ごとの十二枚のカレンダーの一枚であり、それぞれの月にふさわしい花と女性とがあしらわれたものである。この女性は中国の女神にあたるのであろうか【稿末図3参照】。したがって、ヨーロッパに「花暦」がなかったわけではない。とすれば、シーボルトはなぜ「花暦」ではない『茶席插花集』を「花暦」と捉えたのだろうか。

おそらくシーボルトが注目しているのは日本人の花に対する感覚であり、生活と花との関わり方であろう。彼は次のように述べて、日本の「花暦」を紹介しているのである。

四季は規則正しくめぐり、植物界への無感覚ということはいえぬ。戸外に何かの花の咲かない月はなく、それが確かな特徴として一年の経過を指し示す。そのようなことの起こる風土においてこそ、日本列島の人びとや中国の大部分の人びとが満足しているのである。豊かな自然は、この風土の自然人に永遠の暦を与えた。自然は四季を象徴する植物を与え、月々を暗示する花々や果実をきめてくれた。日本人はそこから花暦をつくりだしたのである。

シーボルトが『茶席插花集』から見てとったものは、「四季

を象徴」し、「月々を暗示」させるものとしての植物である。シーボルトの文章にはさらに『茶席挿花集』を「花暦」と捉えた理由と推測される内容が次のように続いている。

ひとつの月を示すべき同一の植物は、なるほど常に存在しているというわけではない。しかし、その月特有の植物の数は二、三ダースもある。そこから花の季節に整序された長い花の輪が出来てくる。趣味や季節に衝突しないような、そんな花輪をよく知るものは花輪づくりの真の職人であろうし、また日本人の芸術愛好家なら誰でもよく知っているに違いない。日本における装飾用の花の時はきちんと知られているので、花鳥画を描いたり、花束や花輪をつくる時などを間違ふことは決してない。スマレやバラの群生、桜草やユリの群生を、人は芸術家の気まぐれと思うより前に植物界の奇跡と認めてしまう。そのように自然の秩序に親しんでいるのである。

すなわち、日本人の心には「花の季節に整序された長い花の輪」は「自然の秩序」として存在しているものであり、装飾用に花を用いる時には決して時と花との関係は間違われることはない。『茶席挿花集』の花もまた、シーボルトにはそうしたも

のの一つとして理解されたのである。花から季節感を汲みとる我々の感性を省みるとき、シーボルトのこの捉え方は、日本の「花暦」の本質を捉えているように思われる。日本の「花暦」は、その月毎に咲く花を纏めたものではなく、その月が到来したことを確認させるものである。

まとめ

日本の「花暦」の成立は次のようにまとめることができよう。春から夏にかけて咲く花は農作業に携わる者には特定の農作業の開始時期を教えてくれるものであるが、風流人にとっては移り変わる季節を感じさせてくれる一部のものでしかなく、その他の季節に咲く花も等しく賞玩すべき対象である。日本の「花暦」はそのような風流の世界から生まれたものであり、そこに選ばれる花は農事暦におけるように一つの時期に一つの花が指定されたものではなく、その頃に花咲く花の総体を指している。そうした月々に整序された花の輪から、人はそれぞれの好みやささまざまな目的によって花を選び、それぞれの「花暦」を作るのである。

〔注〕

注① 一年は四季からなり、一季は六気、一気は三候からなる。

一候は五日。したがって、一年は二十四気、七十二候、三

百六十日である（『和漢三才図会』巻四「時候類・歳」は

一候五日間を「日有二十二時、五日則六十時。是甲子一周

畢。而氣候易故五日謂之一候。」と説明する）。この二十

四気七十二候の制度はかなり古い時代に出来上がっていた

ようで、紀元前四七五年から前二二二年の間に成立したと

推定されている『逸周書』の「時訓」に既に見られる（中

国からの留学生李増先君の御教示による）。一部を掲げれ

ば次のごとくである（「驚蟄」は「啓蟄」と同じであるが、

「雨水」との順序が現在とは異なっている。傍線部が節、

破線部が候である）。

立春之日、東風解凍。又五日、蟄蟲始振。又五日、魚

上氷。風不解凍、号令不行。蟄蟲不振、陰気奸陽。

魚不上氷、甲冑私藏。

驚蟄之日、獺祭魚。又五日、鴻雁來。又五日、草木萌

動。獺不祭魚、国多盜賊。鴻雁不來、遠人不服。

草木不萌動、果疏不熟。

雨水之日、桃始華。又五日、倉庚鳴。又五日、鷹化爲

鳩。桃不始華、是謂陽否。倉庚不鳴、臣不從主。

鷹不化鳩、寇戎数起。

注② 『東臯雜録』は宋の孫宗鑑の撰。文中の「寒食雨」は冬

至から百五日後に起こる疾風と大雨のこと。

注③ 本文は早稲田大学図書館古典籍総合データベースによる。

注④ このことについては土屋敦子「益軒の花譜について」

（福岡女子大学「香椎潟」十一号、一九六六年三月刊）に

詳しい考察がなされている。

注⑤ 結局「花信風」は三つの意味を持つことになる。上田万

年他著『大辞典』（大正六年刊）に次のようにある。

〔一〕春の三月の頃花の開かんとするを知らする風。演繁

露「三月花開時風、名花信風。」〔二〕小寒より穀雨に至

るまで凡そ四月八気二十四候、毎候五日一花の風信を以

て之に応ずるをいふ。歳時記「二十四番花信風」〔三〕一

年中を通じ花の開く頃に吹く風、一月に二回づつ吹き来

る。楊升庵集に見ゆ。

注⑥ 同様に江戸時代に読まれた明の王世貞撰『円機活法詩学

全書』(一之巻・天文門・春風)にも「花信」歳時記

自「初春」至「初夏」、有二十四番風。始於梅花、終於楝花。一謂之花信風。前輩有詩云、二十四番花信風。」とある

(本学教授本間洋一氏の御教授による)。

注⑦ 東洋文庫本『東都歳時記』の注(朝倉治彦氏)に引用さ

れている『花信風』の刊行年は不明であるが、例えば次のような内容のものである。

(忘憂桜) また金王ざくらと云、はなは法りん寺なり。

これは古の花にはあらず。ある故画を見侍しに金王桜は一重白色なるものを書けり。(二二三頁)

注⑧ 程羽文の「花月令」(あるいは「花暦」)の序に(校異は

本稿の筆者による)、

花有「開落涼燠、不可無曆、祕集月令、頗与时舛

〔舛〕或本作「对」、今〔今〕或本作「予」更輯之、

以代「挈壺之位」、数「白記」紅、誰謂山中無「曆日」〔日〕

或本無)也。

とある。「涼燠」は寒涼と温暖、寒暑、また春秋、歳月の意。ここでは時節の意で用いられているようである。

「挈壺」は挈壺氏の略。挈壺氏は漏刻を掌る者。「舛」は混

じり乱れるの意。文意はおよそ次のようになる。あるいはこの内容から程羽文の「花月令」が「花暦」と呼ばれるようになったのかもしれない。

花には咲き散る時節があり、暦が無いはずはない。密かに月令を集めてみると、時節時節の花々の開落はよく暦の時に対応している。私は更に多くの花々を観察し、挈壺氏のように白い花や赤い花の数を数えてみた。山中には暦など無いと誰が言うのだろう。

注⑨ 『国書総目録』に「華暦」元享一冊 類 暦 写 井

本」とある。「華暦」は中国の『辞源』(修訂本)などにも日本の『大漢和辞典』などにも見えないが、「花暦」と同じであり、元享年間(一一三二—一一三三)が誤りなどではないとすると、突出して早い例となるが、今は不審とするしかない。

注⑩ 東洋文庫本『東都歳時記』の注には、「東都四時遊観録』

について「東都弁髦坊輯 草木花暦 江都順覧 四時遊観録』を云うか。

『武江年表』安永年間記事の項に「○俳人松露庵鳥醉『四時遊観録』という両面摺りをあらはす。江戸花暦是れに始まるか」とある。」とある。また同書の解説によると、同

じ斎藤月岑の著『睡余操觚』（文久二年序。国立国会図書館蔵）の第八冊には、安永五年の『花暦』が収められているという。これも『草木花暦 四時遊観録』と同じものであるろうか。

注⑪ 東洋文庫本『東都歳時記一』一五一頁注。

注⑫ 「花かるた」で月々に充てられている花は成立当初の現在のものとは一部異なり、十一月の柳が二月に、十二月の桐が六月に、六月の牡丹が十一月に、二月の梅が十二月に充てられ、松（一月）・柳（二月）・桜（三月）・藤（四月）・

菖蒲（五月）・桐（六月）・萩（七月）・薄（八月）・菊（九月）・紅葉（十月）・牡丹（十一月）・梅（十二月）であったとする説がある。「花かるた」が「花暦」の成立を前提に成立したものとすると、この方が自然ではある。なお「花かるた」については本学教授吉海直人氏の御教示を得た。吉海氏には『「花かるた」の始原と現在』（同志社女子大学日本語日本文学」第十六号、二〇〇四年六月）という論考がある。

注⑬ 『宗及日記』（『天王寺屋会記』の永禄九年〔一五六六〕

から天正十五年〔一五八七〕までの自会記に現れる茶花を

整理すると次のごとくであり（本学大学院生稲垣信子氏の調査による）、同じ種類の花が数ヶ月も用いられている中には帰り花も用いられており（傍線を付したものの、『会記』にその旨を記す）、初期の茶会の花は必ずしも季節の花に限られていなかったようである。

正月 椿（白玉・薄色）・梅（白・紅・黄・緋）・柳
二月 椿（白玉・薄色）・梅・柳・桃（碧・白・赤・緋・野）・チシャ・櫻（熊谷）・菜種の花・ふきのとう

三月 桃・海棠・芍薬・石竹・罌粟・春菊・藤・茗荷・竹の子・山吹

四月 菊・玉椿・芍薬・鳶尾いちぼつ・石竹・大麦・萩
五月 石竹・萩（宮城野）・菊（夏・野）・苗・朝顔・夕顔・桔梗・芒

六月 菊（夏・野）・苗・朝顔・芒・桔梗・朝顔・夕顔・萩・黄瓜・藤

七月 朝顔・萩・桔梗・芙蓉・芒・ハクヘンス・糸瓜・葛・黄瓜

八月 菊・芙蓉・萱草・ハクヘンス・芒・石竹・糸瓜・

瓢箪・萩・葛・白むくげ・山吹・芙蓉（白）

九月 菊（白・高麗・紫）・薔薇・露草・山吹・手鞠・

垣つ端・梅

十月 菊（寒・紫）・金盞花・梅（白）・杜若・芒・水

仙花（金盞銀台）・蒲荻・長春

十一月 椿（白・薄色・玉）・梅（白・寒）・水仙花・菊

（寒）・柳・橘（薄色）・蒲荻

十二月 椿（薄色・白玉）・梅（白・紅・緋）・水仙花・

寒菊・松・柳・桃・金盞花

注⑭ 『池坊専応口伝』は統群書類従本による。なお本稿には生

かせなかつたが、池坊専慶について池坊由紀氏に御教授を

得た。



図1



图 2



图 3